

永平寺門前：道元禅師御歌碑の内容③

#7

7 番目の歌碑は、通りの北側を南に曲がる直前にある。

尋ね入るみやまの奥の里なれば我がすみなれし京なりけり

私がたどり着いたこの人里離れた山奥の村は、昔から自分の心の奥に宿っていた都なのだ。

説明：道元禅師は仲間の僧とともに 1243 年に越前（福井県）に移り住み、賑やかな都、京都を後にした。これは困難な移動だったが、この和歌は、永平寺周辺は、不思議に道元禅師の心の中で以前暮らしていたかのように、なじみ深かったと詠んでいる。またこの歌は度重なる都への帰還の要求に応えた可能性も感じられる。

#8

8 番目の歌碑は永平寺の入り口にあり、道元禅師の最も有名な和歌の 1 つが刻まれている。

春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり

春には桜、夏にはホトギス、秋には月、冬にはこりこりに凍り付いた透き通った雪。

説明：目の前に広がる一年の四季折々の魅力を楽しみながら、すべてが変化する性質を受け入れ、その循環の中で生きることを学ぶのは、悟りの道の鍵となる一歩だ。

#9

9 番目の最後の歌碑は、柏樹關の玄関横にある。

朝日待つ草葉の露のほどなきに急な立そ野辺の秋風

哀愁に満ちた秋の風、そんなに吹かないでくれ。牧草に朝露をとどまらせておくれ。お日様が出ればあっという間に消えてしまうから。

説明：朝露のように、存在は刹那である。道元禅師にとって、これは暗い理解ではなく、はかない人生の美しさをもたらしてくれる機会であった。

